

シスモンディと周囲の人々との交流の一齣

中宮 光隆

I はじめに

シスモンディ (Jean-Charles-Léonard Simonde de Sismondi) 経済学は1803年に刊行された『商業の富』 (*De la richesse commercial ou principes d'économie politique, appliqués à la législation du commerce*) と1819年に初版が刊行された『経済学新原理』 (*Nouveaux principes d'économie politique ou de la richesse dans ses rapports avec la population*) とでは、その論理が大きく変化しているといわれてきた。この変化とは、彼自身が述べているように、前者は「スミスの祖述」であり、スミスの経済学を忠実に踏襲した (と少なくともシスモンディは考えている) 理論が展開されているのに対して、後者はそれを否定する論理が主張されている、というものである¹⁾。周知のようにこれはシスモンディの「転向問題」と称されてきた。しかしながらこの変化について、シスモンディ自身は単なる「修正」と理解している。すなわち、1803年当時と1819年との間の時代の懸隔、とりわけ経済状態の変化によって、現実が生じている経済問題にいかに対応すべきか、さらにそのような対応策を考える以前に、なぜそのような状況が生じたかの原因解明が必要であり、その現状把握と課題解決の処方箋においてスミス理論を「修正」したのだと彼は理解しているのである。後世の研究者がシスモンディ経済学の変化を「転向」と呼ぶのを聞いて、シスモンディは、遺憾なことであると考えてであろう。

そうだとするならば、1810年代末のシスモンディに見られる経済学の「修正」前後に共通する、一貫した彼の思想があると考えることが可能である。それは経済学そのものにも見られるが、ここではむしろその根底にある彼の思想のなかに見いだすことを試みたい。周知のようにシスモンディは、経済学だけでなく歴史、文学、政治等々幅広分野を対象にしており、それらを包含する思想を明らかにすることによってこそ、彼の考え方を解き明かすことが可能になると思われるからである。

そのうえ、彼と周囲の人々との間の、政治・経済・文化・文学・歴史研究等の広範な分野における知見や思想といった知性の交流²⁾を跡づけることは、とりもなおさずその伝播、継承関係を明らかにすることになる。もとより交通の要衝であるとともにさまざまな人々が訪れ、あるいは亡命地として滞在したコスモポリタンな国ジュネーヴで生まれ育ったシスモンディの思想は、また歴史的にも地理的にも多くの交流史の一齣を形成しているのである。言い換えれば、シスモンディの思想の淵源と影響をたどることによって、グレート・ブリテンとヨーロッパ大陸、ヨーロッパ大陸内の東西南北の相互継承発展関係の一端が明らかになるが期待できるのである。

とは言え、上述のような広いパースペクティブを持ちつつも、本稿では扱う対象を限定し、上記の課題は今後の諸論考で逐次検討していくことにしたい。以下、シスモンディの時代におけるジュネーヴとフランスの政治・社会状況およびそこにおけるシスモンディの生涯を確認した後、彼を取り巻く知性の輪を整理し、そのなかのひとつである『立法及び法学年報』(*Annales de législation et de jurisprudence*)を瞥見する。

II シスモンディの時代と彼の軌跡

シスモンディは、1773年5月9日にジュネーヴで生まれた^{2a)}。彼の父(Gédéon-François Simonde, 1740-1810)は聖職者だった。一方、フランスでは1774年にルイ16世が即位し、1777年にはテュルゴの後を受けてネッケルが蔵相となった。すでに1778年に聖職を引退していたシスモンディの父は、1782年

にジュネーヴの「200人委員会」のメンバーに選出されていた。この委員会は貴族などいわば旧勢力の支配を象徴するものであったが、その背景には1782年頃、ジュネーブで外国の干渉によって貴族が権力を掌握したことがあった。このとき亡命した多数の「ナティブ派」は、10年後にジュネーブに帰国し、逆に貴族が出国することになる。

シスモンディの父はネッケルが発行したフランス公債に多額の投資をしていたのであるが、フランス革命の勃発とともにその価値が下落してしまい、彼は若いシスモンディを一時期ヨンの商店に奉公に出したのであった。しかしこのことは、シスモンディに対して、現実とくに経済や政治の動きを直視するとともに、多数の人々の生活を重視する目を養わせたひとつの要因であったように思われる。

1792年11月、フランス軍がジュネーブ近郊まで侵攻した際、バルン・チューリッヒ同盟軍との間で協定が結ばれ、両軍ともジュネーブ国境から撤退するのであるが、その直後ジュネーブ国内で革命が勃発し、行政の全権委譲が要求された（12月末）。翌1793年1月にフランスではルイ16世が処刑され恐怖政治が始まるが、ジュネーブのシスモンディー家はそこを離れ、その後1794年半ばまで約1年半に渡る事実上の亡命生活をイギリスで送った。1794年2月にいったんは収束したジュネーブの革命は、この年の7月に武装蜂起によって再燃し、600人以上が投獄され、有力者が処刑された。シスモンディの父も投獄されたが釈放されたものの、多額の財産税を徴収され、シスモンディー家はフランス国境に近いシャトレヌの土地と家を売却して、この年の秋、イタリアに向かった。シスモンディはそこで土地探しをし、快適なトスカナのペッシャ近くの小作地を買収し、一家は11月にそこに移り住んだのであった。

1796年、ナポレオンはイタリア遠征を開始した。トスカナの中立を犯し、さらにローマに向かって進撃した。翌1797年にこの戦いは終結するが、ナポレオンがエジプト遠征を開始した1798年、ジュネーブはフランスに占領され、併合される。その後1813年末にフランスから独立してジュネーブ共和国が成立するまで、ジュネーブは、フランスのひとつの県になっていた。この間シスモンディは、イタリア諸共和国史の執筆に取りかかるのであるが、未完に終わって

いた。しかし、1799年10月頃『トスカナ農業概観』(*Tableau de l'agriculture Toscane*)を執筆し、これを携えて1800年にジュネーヴに戻っている。その後ジュネーヴ近郊の静かな田園にたたずむ、スタール夫人(Ane Louise Germaine, Baronne de Staël-Holstein)(ネッケルの娘)のサロンに出入りし、多くの知識人や政治家と会話する機会を得ることになる。翌1801年、シスモンディは『トスカナ農業概観』の出版を果たし、これが評価されてレマン県商業・技術・農業委員会の創設メンバーになるとともに、以後、同委員会の書記を務めた。こうして若きシスモンディは、スタール夫人のサロンに出入りする人々との親交のなかで、次第に地歩を高めていくのである。

もっとも、そのサロンに出入りし始めた当初シスモンディは、周囲の人々の会話に加わることができず、悲哀を味わっていたといわれる。しかしそのようななかでも彼は、当時の経済状況の調査・研究をやめなかった。1803年には『商業の富』(全2巻)を出版している。この著書は、周知のようにシスモンディ自身がスミスを祖述したものであると述べている。その1年前に彼は「レマン県の統計」を執筆したものの、未完に終わったと言われる。これはおそらく、シスモンディの日常業務のなかから得られた知見をまとめたものと思われるが、その出版を実現させずに「スミスの祖述」にすぎない『商業の富』を執筆・刊行したのは、彼自身が経済学の体系を理解する必要性を痛感していたからであるように思われる。

その後シスモンディに目立った出版活動は見られない。ただ、1807年に『中世イタリア諸共和国史』の刊行を開始している。これは1818年までに全16巻にのぼっている。また彼は、1809年にアカデミー・ド・ジュネーヴの哲学教授に任命され、さらに1811年秋から翌年にかけて、ヨーロッパ南部の文学に関する講義を担当し、その膨大な講義用原稿を1813年に『南欧文学論』(*De la littérature du midi de l'europe*)として刊行している。後者はスコットランド出身の政治家マッキントッシュ(Sir James Mackintosh)に注目され、『エディンバラ・レビュー』誌に「文学史の哲学」とか「偉大な功績」と高い評価で書評が書かれている。そしてこのことは、シスモンディが、経済学だけではなく歴史学や文学にも関心を抱いていたし、またその分野で優れた才能を発揮していたことを

示すだけでなく、1813年の時点ですでにスコットランドのマッキントッシュがシスモンディと知己の関係にあったことを示している点でも興味深い。

1813年にはイギリス軍がフランスに侵入するなど、ナポレオンの勢いは弱体化していた。この年の12月31日、フランスからジュネーヴ共和国が独立した。これに伴ってシスモンディは、レマン県の行政職を退いている。翌1814年8月にジュネーヴ共和国臨時政府によって憲法草案が作成され、9月から10月にかけて代議員議員選挙が行われた。シスモンディも当選し、その後彼は、1841年11月まで代議員を務めた。

1814年にシスモンディは、ジュネーヴで行われた歴史哲学に関する講演内容をまとめた『ジュネーヴに関する考察』を出版している。さらにエルバ島に流されたナポレオンが1815年にパリに戻っていわゆる百日天下になったとき、ナポレオンはバンジャマン・コンスタン (Benjamin Constant) に新しい憲法の起草を依頼している。4月はじめにこの話をコンスタンから聞いたシスモンディは、はやくも5月になって官報にナポレオンとコンスタンを擁護する論文を発表し、また『フランス憲法典の吟味』 (*Examen de la Constitution Française*) を刊行している。しかしその後半年も経ないこの年の10月に、ナポレオンは再び失脚してセントヘレナに流されたのであった。

1816年、シスモンディは、3姉妹とともに大陸旅行中のジェシー・アレン (Jessie Allen) に会っている。ジェシーはマッキントッシュ婦人キャサリン (Catherine) の実妹である。シスモンディとジェシーの2人は3年後に結婚するが、この間はシスモンディにとって文字通り大きな転機であった。それは『エディンバラ百科事典』 (*Edinburgh Encyclopedia*) のなかの「経済学」について執筆依頼を受けたときに始まった。スコットランドで発行される百科事典に、しかも「経済学」に関してはスコットランドにもイングランドにも他に執筆可能な人々が多数いるのに、なぜシスモンディに依頼が来たのかについて、パッペは、ピエール・プレヴォの仲介によるものだと述べている。いずれにしても、百科事典の編集者とシスモンディ、あるいは両者の仲介者に共通の認識や思想があったことがその理由のひとつではないかと考えられる。

『エディンバラ百科事典』の「経済学」執筆は、周知のようにシスモンディ

経済学に「転向」と言われる転換をもたらした。「スミスの祖述」から「スミス経済学の部分的な修正」への転換である。しかしながら、この転換はたんに「部分的」なものにとどまらない。彼自身が述べているように、『エディンバラ百科事典』執筆のために改めて経済学を勉強し、また経済の現実をつぶさに観察したシスモンディが目にしたのは、イギリスを襲った1815年の過渡的恐慌であった。その結果導かれたシスモンディの結論は、市場をめぐる諸資本間の競争の制限と、社会全体の消費量をより多量にすることを可能にするための分配の平等化、さらにそれらを可能にするための政府による経済活動への介入であった³⁾。すなわち、経済学の歴史だけでなく、シスモンディ自身の経済学理論において、「自然的自由の体系」から政府の市場への介入への転換がなされたのである。

『経済学新原理』出版後のシスモンディは、歴史研究に携わる傍ら、経済学の「新しい原理」の正当性を、さまざまな機会を通じて主張している。1822年には彼は、大陸旅行中のリカードウに面会し、たがいに議論を交わしたのであるが、その際リカードウはシスモンディを論破したと大陸紀行に記している⁴⁾。しかしながらシスモンディは、リカードウに屈したわけではなかった。とりわけ1825年恐慌を自分の理論の正しさを証明する出来事として受け止めるシスモンディは、逆にますます確信を深めたのである。『経済学新原理』初版刊行以降に執筆発表した諸論文は、1837-8年に出版された『経済学研究』に採録されている。シスモンディがジェシーと結婚したのは『経済学新原理』初版が刊行された1819年だったから、その後生涯、彼は自身が打ち立てた「新原理」を守り抜いたのであった。

1842年6月25日、シスモンディは、10年前にジュネーヴから移り住んだシェーンで69歳の生涯を閉じる。

Ⅲ シスモンディを取り巻く人物像

『商業の富』から『経済学新原理』への転換、いわゆるシスモンディの「転向」の背景には何があるのだろうか。そこには、たんにシスモンディの現実

感覚あるいは恐慌という現状把握があるのみではなく、彼の社会観や世界観といった思想があると見るべきである。とりわけ恐慌という深刻な課題を克服するための諸施策に関する彼の積極的な提案—強い政府による経済への介入・規制、より平等な分配—は、たんなる経済の現実直視からは説明しきれないものがある。それを説明するのは、彼が生きた時代の諸事象であり、彼の思想であり、その思想形成に至った生い立ち、とりわけ彼の周囲の人々とその思想であったと思われる。

それでは彼の周囲にはどのような人物がいたのであろうか。パッペ（Hellmut Otto Pappé）はシスモンディの周囲の人物を2つの時期に分けて取り上げている。まずシスモンディがまだスミス理論の「祖述」にすぎない経済学を展開していた時期に彼に影響を与えた人物として大きく取り上げているのは、コペのスタール夫人のサロンに集った人々とともに、ミュラー（Johann von Müller）とマレ（P. H. Mallet）、それにフランスのガニール（Charles Ganilh）とセー（J.-B. Say）、さらにゴッドウィン（William Godwin）、ベンサム（Jeremy Bentham）、デュモン（Etienne Dumont）等の名とともに、1796年にジュネーブで刊行が開始された雑誌『ビブリオテーク・ブリタニク』（*Bibliothèque Britanique*）誌である。また、パッペが『経済学新原理』以後の時期について取り上げているのは、プレヴォー（Pierre Prévost）、ピクテ（Marc-Auguste Pictet）、ウィショウ（Josiah Whishaw）、マーセット（Jane [or Jeanne] Marcet）、それにオーウェン（Robert Owen）等である。

しかしながら筆者の私見では、『経済学新原理』（というより『エディンバラ百科事典』の「経済学」執筆）以前とそれ以後では確かにシスモンディ経済学は大きく変化しているとはいえ、経済理論の背後にある彼の思想においては大きな「転向」は見られないというべきである。『経済学新原理』における理論展開から見える彼の思想には、それ以前から交流があった人々の考え方から受けた影響も強いと考えられるからである。それは、『経済学新原理』においてシスモンディがスミスを「部分的に修正」したとする理論に見いだされるのであり、修正された理論とは周知のように、政府の市場への介入であった。この論点とともに、『経済学新原理』以後におけるオリジナルなシスモンディ経済学のもう

ひとつの柱である平等な分配の論理の必要性に関しては、パッペの言う『経済学新原理』以前に交友があった人々、とりわけ雑誌『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の編集者たちが主張する功利主義からの強い影響が読み取れるのである。すなわち、その編集者たちとの交友が始まった18世紀末から19世紀初めの時期、シスモンディが弱冠20歳頃接したさまざまな人々の思想を、彼は生涯持ち続けたとみるべきであろう。

それだけではない。パッペは簡単に触れるにとどめているが、若きシスモンディに思想的影響を与えた人物にマッキントッシュがいる。ウィッグに属する啓蒙主義者で議会改革者であったマッキントッシュも、おそらく19世紀初め頃からシスモンディと親交があったと思われる。(少なくとも前述のように1813年には同じ年に刊行された『南欧文学論』の書評をエディンバラ・レビュー誌に掲載している。) 両者は義兄弟になる以前もそれ以後も、たがいに親しく議論を交わしていたことは、たがいに交換しあった両者の手紙からも読み取ることできる⁵⁾。

シスモンディに影響を与えた思想家や政治家は概略、以下のように整理することができる。第1のグループは、スタール夫人のサロンに集った人々、スタール夫人はじめコンスタンやシュレーゲル (August Wilhelm von Schlegel) それにシャトーブリアン (Chateaubriand) 等々。これらの人々はナポレオンとは距離をおいていたとはいえ、共和制を支持していたといわれる。シスモンディも、ベツシャに移り住んでまもなく、トスカナの中立を犯しローマに向かって進撃するフランス軍によって投獄されたときでさえ、ナポレオンに対して好意的な見方を母親に宛てた手紙の中で語っていた⁶⁾。さらに前述のように、百日天下の際にナポレオンから憲法草案の起草を依頼されたコンスタンはこれを承諾し、その内容をシスモンディも好意的に評価しているのである。コンスタンもシスモンディも、フランスの王政復古を危惧したからであるといわれる。コンスタンはまた、周知のようにゴッドウィンを高く評価し、1798年から1800年にかけて「ウィリアム・ゴッドウィンの『政治的正義に関する考察』以後の政治的正義」(*De la justice politique d'après l'«Enquiry Concerning Political Justice» de William Godwin*) を執筆している。この間はまた、コンスタンは、コペにあ

るスタール夫人のサロンに出入りしていた時期でもある。第2のグループは、『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の編集者たち、すなわちピクテ兄弟（Marc-Auguste Pictet, Charles Pictet (Pictet de Roschemont)）とモーリス（Frédéric-Guillaume Maurice）である。シスモンディは、20歳あまり年上のこれら編集者たちから多くを学んだといわれる。第3のグループは、前記第2のグループとも関係するが、プレヴォ（Pierre Prévost）や彼と親しかったとされるデュガルト・ステュアート（Dugald Stewart）やマーセット（Marcet）家の人々等である。やはり20歳あまりも年長のプレヴォとシスモンディの間の書簡も多く残されている⁷⁾。第4のグループは、デュモンや前述のマッキントッシュなど、シスモンディと同世代の功利主義者やイギリスの議会改革者たち、そして第5のグループは、スミス（Adam Smith）やリカードウ（David Ricardo）、それにセー（Jean-Baptiste Say）といった経済学者たちである。もっともこれらの人々は、シスモンディにとって、経済学の師であるとともに批判の対象でもあったことはいうまでもない。

これら5つのグループの共通項を取上げてあげるならば、功利主義と政治的自由、共和主義と政治（議会）改革であろう。そしてその根底には、一人ひとりの個人（諸個人）を重視し、多数の人々の幸福を基礎にした社会の発展という理想があるように思われる。

ところで、『立法及び法学年報』（*Annales de législation et de jurisprudence*）は、1820年から1822年にかけてジュネーヴで刊行された全3巻の雑誌である。3年間発行された後、タイトルを『立法及び経済学年報』（*Annales de législation et d'économie politique*）に変更している。前者における主要な執筆者は、ロッシ（Pellegrino Luigi Odoardo Rossi）、デュモン、シスモンディ、それにベロ（Pierre-François Bellot）等である。

1820年に刊行された第1巻には、序文のあと、7編の論文や翻訳、それに抄録が収められており、翌年の第2巻には12編の論文、翻訳、抄録が掲載されているが、1822年の第3巻には2編の抄録と短い「お知らせ」があるだけである。これらのなかではロッシによる著作や抄録が第1巻に巻頭論文を含めて2編、第2巻に7編、合計9編と全体の半分弱を占めており、あたかもロッシの論文

集のように見える。おそらくこの雑誌の編集者たちのなかでも、ロッシは、主導的な立場にいたことが想像できる。デュモンは第1巻と第2巻にそれぞれ1編ずつ、警察と裁判所に関する論文を寄せている。また、ドイツ歴史学派のサヴィニー（F.K. von Savigny）の「中世ローマ法史」が第1巻から第3巻まで3回（第1巻に2編あり、合計4編）にわたって抄録が掲載されている⁸⁾。これらはメイニエ（Meynier）による抄録と記されているが、この人物は第2巻で「ベンサム等による市民法と刑法に関する考察」と題する論文を執筆している。

この雑誌の創刊号に収められた無署名の（従って編集者や創刊者たちに共通する思想が表現されていると思われる）序文に、以下の一節がある。

「近年、法学が取り掛かってきた新たな方向、公法であれ私法であれそこに関わるあらゆる事柄につねに向けられる関心、ヨーロッパの多くの国々でこの視点から打ち立てられたかに見えるさまざまな方法、そして最後に事象の経過に督促されたときにわれわれの思考活動が陥りがちな危険、—それらには公法学者や法律家たちに彼らの努力をひとつに結びつけなければならぬと思わせる多くの動機があり、その結果、法学の新たな萌芽が幸運な発達を遂げるとともに、寄生植物や有毒な植物がそれらの芽の成長をもみ消すことなどしなくなるである。」（*Annales*, 1820, *Avan-propos*, p.v）

編集者や執筆者たちは、激動の時代のジュネーヴにおいて、統治の学問（たんに法律だけでなく経済や思想を含む広い分野の地検—いわば「知性」）の必要が強く感じていたのであろう。

シスモンディは、第1巻に、「消費力は社会においてつねに生産力とともに増加するか？」というタイトルの論文を寄せている。法学に関する論文や抄録が大多数を占める本誌のなかでは異色の感があるが、この巻が刊行された1820年は『経済学新原理』が刊行された翌年であり、シスモンディがあらゆる機会を利用して自著の主張を弁護していたことがわかると同時に、彼は経済の問題は統治の課題、あるいは法や政治の課題でもあるとらえていたことを示唆しているともいえるだろう。

IV おわりに

シスモンディを取り巻く思想家や政治家等々を瞥見してきた。17世紀末から18世紀初めにかけての若きシスモンディに、彼の生涯を貫く思想の形成に寄与した『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の編集者たち、デュモンとともに彼らは、シスモンディに功利主義思想を伝えたと言えよう。スコットランドを中心にしたグレート・ブリテンの思想家・政治家たち、彼らは1810年代のシスモンディに、現実への直視と現状改革の姿勢を植え付けたのではないだろうか。そしてスタール夫人とそのサロンに集った人々、とりわけコンスタンは、政治思想ははじめさまざまな分野の知的刺激や知見をシスモンディに与えた。シスモンディはしばしば「ロマン主義者」と評されるが、それは、シスモンディの思想に見られるスタール夫人とその周囲の人々の名残りであろう。

シスモンディがたんに経済学だけでなく、歴史学や文学、政治学をも研究対象にしてそれぞれ著作や論文を執筆しているのも、彼を取り巻くこのような多種多様な分野の多くの人々との交流があったからこそ可能であったといえる。。

そのなかでも功利主義は、シスモンディの多様な知的テリトリーの基盤的思想であるように思われる。彼どくとくの経済思想は、そのような思想構造抜きにしては理解し得ないものである。経済の混乱、生産しても販売不能という事態、その中で生活維持手段を確保できない多くの人々—そして国民のなかにある貧富の差、これらが経済発展と人々の愉楽（生活の楽しみ）を抑制する根源であると理解する彼は、逆に、多数の人々へのより平等な分配を通じてこそ確実で安定した経済成長が可能であり、したがって「最大」の幸福が実現されると考えているのである。シスモンディによる「新しい」経済学＝『経済学新原理』は、彼を取り巻く人々、特に彼の前半生におけるそれらの人々から得た思想のうえに築かれた原理なのである。

（本稿は、平成20年度科学研究費補助金（基盤研究（C）・課題番号20530170）による研究成果の一部である。）

注)

- 1) 詳細は拙著『シスモンディ経済学研究』三嶺書房, 1997年, の「序 II 従来のシスモンディ論」(pp. 7-15) および同「III 古典派経済学とシスモンディ」(pp. 15-19) 参照。
- 2) 従来の経済学理論史を前提にしつつ, より広い視野から深く思想を探る研究に, 飯田裕康「知性史のなかのリカードウ — Political Economy, 自然誌, 政治—」(飯田裕康, 出雲雅志, 柳田芳伸編著『マルサスと同時代人たち』日本経済評論社, 2006年) があり, 注目される。筆者は飯田裕康先生から, マッキントッシュはじめ同論文の「はじめに」で取り上げられている多数の同時代人たちについて, 多くのご教示を受けた。記して謝意を表したい。
- 2 a) シスモンディの生涯と彼の著作や草稿類に関するわが国の研究としては, 小池渺氏による以下の一連の論文が詳細で大いに参考になる。筆者もそこから多くの示唆と知見を得ており, 本節の一部もそれらを参考にしている。小池渺「シスモンディ研究序説—シスモンディの生涯と彼の遺産—」(『経済論集』(関西大学), (上) 第42巻6号, 1993年3月, (中) 第43巻3号, 1993年8月, (下) 第43巻5号, 1993年12月, (完) 第43巻6号, 1994年3月)。また欧文で代表的な研究文献としては, Jean-R. de Salis, *Sismondi, 1773-1842, La vie et l'oeuvre d'un cosmopolite Philosophe*, 1973 (Réimpression des édition de Paris, 1932)がある。
- 3) この点については, 前掲拙著, 第8章「生産の抑制と分配の平等化」を参照。
- 4) この点については, 拙稿「シスモンディとリカードウの一接点」熊本県立大学総合管理学会編『新千年紀のパラダイム —アドミニストレーション— (熊本県立大学総合管理学部創立10周年記念論文集) (上巻)』九州大学出版会, 2004年) 参照。
- 5) シスモンディとマッキントッシュとの間で交わされた手紙は, ロンドンの大英図書館やジュネーヴ大学公共図書館に所蔵されている。後者については, 筆者の知る限りでは1編のみであるが, 前者については少なからざる量の手紙が所蔵されている。一部は前掲拙稿でも紹介した。
- 6) 投獄されたシスモンディが獄中から母に送った手紙の中に次の1節がある。「一国にとっての名誉, 正義, 徳, 幸福は自由のなかにしかないし, 反革命を革命よりも百倍も悪い」(de Salis, Jean-R., *op. cit.*, P38.)
- 7) ジュネーヴ大学公共図書館に多数所蔵されている。
- 8) 筆者はサヴィニーに関する研究を現時点で何ら持ち合わせておらず, 今後の課題にした。しかし, かつて同僚が本誌に掲載された論文 Hidetake Akamatsu, “Das reale Bild der Zibilistik im 19. Jahrhundert in Deutschland”, 熊本県立大学総合管理学会編『アドミニストレーション』第4巻3-4合併号, 1998年3月, の所在のみ指摘しておきたい。